



B2

ニュースレター

2026/3/31

実は1月の道の駅フェスも事務方として協力してました

来期の観光協会の主な事業
黒松内岳山開き

【令和7年度を終えて】

皆さま、こんにちは。事務局長の河又です。
令和7年度第4四半期も無事に終了し、新年度がスタートしました。

【フットパスクラブ通信】
黒松内フットパスクラブ主催イベント
「中央分水嶺を歩く - 第8弾 -」の報告で
ございます。

現職に就いて3年目を迎える今年は、私にとってもより具体的な成果が求められる節目の年となります。
本年は「第4次黒松内町総合計画」の後期基本計画がスタートする年でもあり、件より要望している町としての観光ビジョンをなるべく早期に策定した上で、我われ自身も観光事業の立場から「黒松内町が目指すべき未来の姿」を実現すべく、そのための第一歩を踏み出す年にしたいと考えています。

【事業報告】
今年も観光交流ネットワークミーティングを実施しました。かれこれ15回もやっているそうです！すごいですね。

関係の皆さまには、この1年間のご厚情にあらためて感謝を申し上げますとともに、令和8年度におきましても尚一層のご支援を賜りたく、引き続きご協力のほどよろしくお願いたします。

【調査報告】
無料と聞いて飛びついてみたものの・・・
大通の一等地でも、静かなところは静かなのねと驚いた話

【新商品「鮎の炊き込みご飯の素」の販売を開始します！！】
諸般の事情により、製造・販売を延期しておりました「鮎の炊き込みご飯の素」ですが、このほど商品も無事に入荷され、いよいよ販売を開始する運びとなりました。

【じり通信No.39】文：山本竜也
続いてきたものが終わるといのはちょっと寂しい話になりますね。

企画にあたっては「これぞ黒松内土産！と言えるようなオリジナル商品の開発」をコンセプトに、町の特産品である天然鮎を使用し、お子様からお年寄りまで老若男女を問わず誰もが楽しめるような商品を目指しました。



本品はご自宅用としてご家庭で手軽にお楽しみいただけるのはもちろんのこと、黒松内ならではの“ふるさとの味”として町外に暮らす方々への手土産やご進物といった用途にも最適です。また、賞味期限は常温で約1年半と長期の保存が可能となっておりますので、緊急時の保存食としてもご活用いただけます。

【どっちがいいのかな？】
最後は好みの問題なんだけど、どうする方がより良いのかなあ？

商品のお取り扱い、「道の駅くろまつない」や「黒松内温泉ぶなの森」といった町内の主要施設をはじめ、町の内外で開催される各種イベントでの販売等も検討していますが、初回となる本年度は1,000個限定での販売となりますので、店頭でお見かけの際はどうかお早めにお買い求めください。

【編集後記】
年度末ですね。来年度なにしようかな？

協会主催・協力イベント

黒松内岳山開き
雪が解けたら山開き！
今年は5/24(日)の予定です。
詳細は改めてアナウンス予定です。

フットパスクラブイベント開催
5/16(土)にフットパスクラブでイベントを実施予定です。内容など詳細が決まりましたら、お知らせいたします。

フットパスクラブ通信 Vol. 23

中央分水嶺を歩く - 第8弾 - レポート

3月1日(日) 黒松内フットパスクラブ主催イベント「中央分水嶺を歩く 第8弾」を開催しました。今回のコースは約6.5km、高低差は約100m。前回に続いて歩きごたえのある内容でしたが、総勢35名となりました。毎年人気のこの企画は、今回も募集開始からわずか3日ほどで定員に達し、関心の高さがうかがえました。

当日は最低気温-3℃、最高気温3℃の曇り予報。それでも視界は良好で、遠くまで広がる景色を楽しめる一日となりました。風速は4mほどの予報でしたが、コース上には風が一気に吹き抜ける場所が2か所ありました。

スタート地点は、東栄地区高速道路付近にある長万部町との町境周辺。今回歩いたエリアは比較的平坦な場所が多く、参加者からは「ここが分水嶺なの?」「どちらが日本海で、どちらが太平洋?」といった声も聞かれました。地形を読み解きながら進むこのコースは、ガイドの案内があつてこそ楽しめる“奥深さ”が魅力のひとつでした。

お昼の休憩場所は、ちょうどその風の通り道。強風にさらされながらのランチタイムとなりましたが、それもまた冬ならではの思い出です。冷たい風の中でいただく持参のお弁当は、いつも以上にありがたく感じられたのではないのでしょうか。復路はショートカットする形で別のコースを歩き、スタート地点まで足早に戻りました。大きなトラブルもなく、今回も無事にイベントを終えることができました。

(事務局: 岡本)



分水嶺イベントの様子



クマガワの食痕を眺める参加者

事業報告

第15回 観光交流ネットワークミーティング実施報告

2月24日(火) Kumagera Kitchen Kirikalにて観光交流ネットワークミーティングを開催しました。講演会・ワークショップ・交流会の3部構成で開催され、定員いっぱいの20名が参加。黒松内町内はもちろん、長万部町や寿都町からも体験型観光に関心の高い方々が集まり、地域を越えたつながりと可能性を感じる時間となりました。

始めに企画環境課課長の桜井課長より、第4次黒松内町総合計画後期計画(R8~R11年度)における観光分野の概要説明を行っていただき、これからの地域づくりと観光の方向性を共有しました。

続いて行われた講演会では、北海道アドベンチャートラベル協議会事務局長兼(株)宝島旅行社の執行役員を務める菊池敏孝氏が登壇。北海道における今後の体験型観光の可能性、今後の展望についてお話しいただきました。黒松内町をはじめとした隣接地域に期待される役割にも触れられ、参加者にとって多くの気づきが得られる内容となりました。

その後のワークショップでは、参加者が4つのグループに分かれ、「黒松内町と隣接地域で体験型観光を盛り上げるための取り組み」をテーマにワークショップを実施。体験型観光における地域の強みや課題を挙げ、解決・発展させる方法を地域資源の活かし方や連携のあり方など、現場の方々ならではの視点にあふれた多彩なアイデアが発表されました。今後は、今回寄せられた提案を一つひとつ整理し、実際の取り組みへとつなげていく予定です。

交流会では、参加者それぞれが取り組んでいる活動や地域への思いについて語り合い、会場は終始和やかな雰囲気になりました。新たな出会いや情報交換も生まれ、今後の連携につながる充実した時間となりました。(事務局: 岡本)



菊池氏



菊池氏の講演の様子



ワークショップの発表中の様子

調査報告

札幌と黒松内

なんとタダでPRエリアを貸してくれるということだったので、1/23(金)に北洋銀行ビルの1階にお邪魔して、ちょうど開催中の道の駅フェスの宣伝をしつつ、アンケート調査を実施しました。平日昼間+冬で地上は寒い歩きにくいと色々な要素が重なったんでしょう。10時頃で写真のとおり、地上はとても静かな場所でした。※逆にチカホは人通りが凄い

人がいないじゃ聞きようがない！！と大層焦りましたが、昼過ぎに謎のプチラッシュが来たおかげで、結果としては回答数33となり、この景色からは想像できないほど回答してもらいました。ありがたい話ですね。多謝。

なにをきいてきたの？

黒松内のイメージやら来たことあるかとか何があったら来てみたいか？とかです。で、結果ですがアンケート結果の1位をそれぞれ書き出すと、

黒松内は

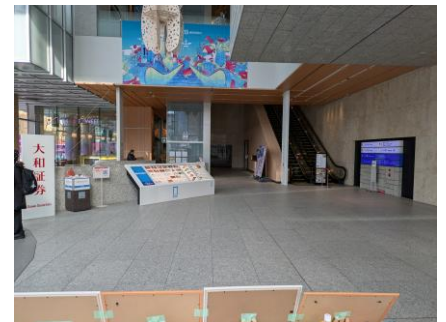
- ・どこにあるのかよくわからない or 行ったことある(同率1位)
- ・黒松内といえば水！
- ・(存在をしらないので)立ち止まるって発想がなかった！
- ・特別うまいもんがあれば立ち止まってもいいかな

そんな風に札幌の人はこの町を見ているようです。

詳しい情報を知りたい方は観光協会にコンタクトとってみてくださいませ。

いままでなんとなく感じていたことを実際に記録として残してみようという試みだったわけですが、やっぱそうだねってのもあれば、あれ？意外とそんな感じなの？と驚くようなデータが取れたりしておもしろいですね！

冬場は条件がそんなによろしくなかったんで、もう少し暖かくなったらまたやってみると今回とはまた違う結果が出たりするかも？ですね(事務局：遊佐)



結構さみしい景色

じり通信No.39

雑誌の終焉文：山本竜也

永遠に生きる人間がいないように、永遠に発行が続く雑誌もない。とは分かっているのだが、やはり寂しい。雑誌『BYWAY後志』が今年1月に発行された第30号をもって幕を閉じた。

『BYWAY後志』は、小樽とニセコばかりに焦点が当たる後志観光の底上げを図るために「後志の奥行きを伝える活字メディア」として2007年1月に創刊された。2008年6月に南後志に関するウェブサイトを立て上げた私は、この雑誌を読んで、とある記事に関する誤りに気付き、自分のサイトで指摘した。事務局の久須美英男さんがそれを見て、寄稿を誘ってくださって、現在まで続く縁が始まった。私が何冊も本を出したり、さまざまな媒体に文章を載せたりできるようになったのも、『BYWAY後志』のおかげである。

廃刊にあたって、久須美さんが全記事の一覧を作成した。黒松内の記事は、塩作り、自然学校、ばんえい競馬、料理店、ピザ、ブナ林、サイロ作り、松浦武四郎など26本を数える。私自身も、黒松内で60年以上にわたって写真を撮り続けた矢野行信さんとその作品について、また大金鉱山で働いていた人たちへのインタビューや跡地の探索記事も書いた。

黒松内に限らず、この雑誌がなければ、残らなかった話も多い。将来、2000年代から2020年代の後志を調べる歴史家に、この雑誌は一級資料として用いられることだろう。

超大手のじゃらんですら紙媒体から撤退している(北海道除く)のが現状であり、紙には紙の良さがあるというのは私も感じますが、別にそうでもないよって人が増えたってことですかね？？
そもそも興味ないとかお金ないとかもつと身もふたもない理由かも？と考えると世知辛いですね(事務局：遊佐)



どっちがいいのかな？

標準化と独自路線

ユニバーサルデザインという考え方がある。

まちづくりに応用すると、すごく乱暴な言い方をすれば、判で押したような町をいっぱい作る事になるのかなと思う。

どこに行っても同じチェーン店があり、同じような交通環境で、どこでも同じように使える町というのは、ある種の機能美すら感じる素敵な在り方ではなからうか？ 関東圏なんかは割とそんな感じになってる町が多いように感じる。

ただ、どこに行ってもほとんど同じという金太郎飴的な状態は、じゃあここを目指そう！とはなりにくい。ここは明確な欠点である。

一方で独自性を！という声も根強い。だが、そんな独自性を本当に誰かが求めているのだろうか？

独自性といえば聞こえはいいが、言い変えれば、複雑怪奇な風習があるということだ。それは住んでいるから当たり前なだけであり、よそから来るとたまげてしまうようなことかもしれない。住めば都とかいう話以前の問題である。それがいい意味での驚き・発見的な物ならいいが、悪い印象が付くようなものかもしれない。バランス感覚が重要になりそうだ。

金太郎飴のような標準化された町はユーザーに「便利・快適・親切」を提供するが、それ以上の強みがない。

独自路線をいく町は「不便や事前学習」といったコストをユーザーに強いる代わりに「他にはない体験」を提供できる。

そして、どちらでもない「いいとこどり」という方法もないわけではない。ラーメン二郎だ。

同じ看板を掲げているが接客スタイルもメニューも味もトッピングも量も更には料金さえも店ごとにバラバラである。だが、どの店に行っても雰囲気の違いはあれど、食券を買って行列に並び、同じ合言葉「ニンニク入れますか？」があり、最後は二郎を食った！という圧倒的な満足感と体験を得られる。

マクドナルドやケンタッキーの様な「いつでもどこでも食ってもいつもの味」というユニバーサルデザインではないが、個人店のように「完全俺ルール、俺の好みの味」という訳でもない。今日は腹いっぱい食いたいから品川店とか、殺伐とした気分を味わいたいの目黒店、神豚や味の上振れを信じて三田本店といった選択肢を存在させているのが最もユニークであり、中間をとって成功している例としては見事なお手本である。

どれが良い悪いという話ではなく、どれが好みか。それだけのことである。

中間をとるならどこまで汎用性を持たせるデザインにするのか、考えてみると面白いかもですよ(事務局：遊佐)



編集後記

ヒーローと望み

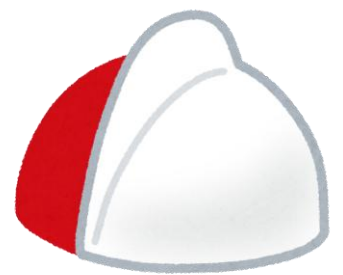
ウルトラマンは怪獣退治の専門家である。つまり仕事として怪獣を倒して回っているということである。地球人類は怪獣が出るとウルトラマンに助けを望む。仕事(とハヤタを死なせた詫び)も兼ねているのでウルトラマンは怪獣を倒してくれる。

だが、人類が怪獣を倒してほしいと望んでいない場合はどうだろう？

なんとなく怪獣いなくなればいいのに～と思いながら滅びを待っているだけだと、ウルトラマンはやってこないのかもしれない。

ウルトラマンだって暇なわけではない。望まれぬ地で3分という理不尽な制限を受けながら怪獣退治をするよりも、より仕事の効率のいい地へと、ハヤタとの合体を解いて旅立つのではないかな？ 町づくりも同じことじゃないだろうか？ カラータイマーはずっと青いままとは限らない。

なので勉強会って程じゃないけど、定期的集まってざっくばらんに話をする場というのをちゃんと作っておきたいな～なんて考えてます。



観光協会HPにて[B2]バックナンバーがご覧になれます。

www.bunatatourism.com

印刷版をご希望の方は観光協会までご連絡ください。



発行人：一社) 黒松内町観光協会 発行日：2026/3/31 次回発行予定は6月末

TEL：0136-72-3597 FAX：0136-75-7070 Mail：bunatatourism@gmail.com